ISSN 0289 − 4130

研究紀要

第30号

—設立35周年記念—

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 —関東・中部地方の事例研究— 尾田　識好

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 古谷　渉

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 中川　莉沙

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について 松浦　誠

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 上野真由美 柴田　徹 西井　幸雄 麻生　敏隆 坂下　貴則 小茂田　幹 大屋　道則

埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 山田　琴子 上野真由美 赤熊　浩一 小林まさ代 大屋　道則

関東地方における周溝持建物の系譜 福田　聖

埼玉県における横穴式石室の分類と編年 —無袖石室と片袖石室を対象に— 青木　弘

北武蔵児玉地域における内斜口縁坏の編年的位置づけ 山本　良太

盾持人埴輪頭部の分類と変遷について 長谷川啓子

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察 —埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に— 渡邊理伊知

古代寺院における食堂院の構造 —平城京遷都後の官寺を中心に— 香川　将慶

2016

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

序

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 …… 尾田　識好　（1）
　―関東・中部地方の事例研究―

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 …… 古谷　　渉　（19）

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 …… 中川　莉沙　（37）

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について …… 松浦　　誠　（57）

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 …… 上野真由美
柴田　　徹
西井　幸雄
麻生　敏隆
坂下　貴則
小茂田　幹
大屋　道則　（69）

埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 …… 山田　琴子
上野真由美
赤熊　浩一
小林まさ代
大屋　道則　（79）

関東地方における周溝持建物の系譜 …… 福田　　聖　（87）

埼玉県における横穴式石室の分類と編年 …… 青木　　弘（107）
　―無袖石室と片袖石室を対象に―

北武蔵児玉地域における内斜口縁坏の編年的位置づけ …… 山本　良太（135）

盾持人埴輪頭部の分類と変遷について …… 長谷川啓子（149）

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察 …… 渡邊理伊知（163）
　―埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に―

古代寺院における食堂院の構造 …… 香川　将慶（181）
　―平城京遷都後の官寺を中心に―

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動
—関東・中部地方の事例研究—

尾田　識好

要旨　本稿では、関東・中部地方の「ナイフ形石器文化終末期」（18,000 ～ 17,000 ^{14}C yr BP）に位置づけられる、小型尖頭器と掻器を特徴的に伴う遺跡の石器製作・運用技術のパターンを抽出し、それを残した集団の地域的な行動について予察する。各遺跡の組成は類似し、黒曜石を集中的に消費している。主体となる産地の黒曜石から主に尖頭器と掻器を製作・使用し、野尻湖周辺と赤城山麓では補助的に利用している産地の黒曜石に掻器をはじめとした加工具が目立つ。小型尖頭器と掻器を伴う遺跡を残した集団は、その分布からみて中部高地以南の文化系統である。武蔵野台地や多摩丘陵、下総台地を主たる生業域としていた集団が、信州産と高原山産の黒曜石を用いて、狩猟活動とそれに伴う加工作業を重点的に行った。また、彼らが生業域の境界や外縁における地域集団間の社会的な活動にも関わっていた可能性を展望した。

はじめに

関東・中部地方のいわゆる「ナイフ形石器文化終末期」（神奈川考古同人会 1979・1980 等）（18,000 ～ 17,000 ^{14}C yr BP）（註 1）は、大略的にみると、石製刺突具である石刃・縦長剥片製ナイフ形石器と両面・半両面・片面加工の尖頭器が並存しながら、前者から後者へと漸進的に変化する時期に相当し、これに続いて細石刃が出現する。

したがって、「ナイフ形石器文化終末期」は、この地域における動物資源利用に関わる狩猟採集民の技術と行動の変化を考える上で重要な時期の一つといえる。

この時期をめぐっては、ナイフ形石器、尖頭器、および細石刃に関わる技術形態の比較分析により、その移り変わりが把握されるとともに（栗島 1986、鈴木 1986、樫田 1987、織笠 1987、諏訪間・堤 1985、諏訪間 1988・2001）、石材の調達・消費戦略の観点から遺跡間の機能的な関係を説明しようとする研究（国武 1999・2000、鈴木 2003、島田 2008）や、生態環境への適応という観点から刺突具の変化を読み解く試みがある（仲田 2006）。

こうした研究の多くは、この時期に相当するローム層の堆積が厚く、安定した、多層位遺跡が多く検出されている相模野台地の資料を中心に行われてきた。ただし、相模野台地以外（武蔵野台地、下総台地、箱根・愛鷹山麓等）では、こうした条件に乏しいこと等が影響し、石器群の編年とその対比が困難である（亀田編 2005、三瓶編 2005、栗原・三瓶編 2006）。

また、気候変動による振幅はあるが、当該期に地域ごとの資源に応じた集団の分化がいっそう進み、生活圏・様式圏が確立したとすると、状況はさらに複雑である（田村 1992、佐藤 1992・1995、国武 2003 等）。そのため、先行する「砂川期」や、石器群の抽出が容易な細石刃石器群に比べ、人類の移動・居住形態の研究（佐藤 1997）は解明途上である。

ところで、この時期には、小型尖頭器と掻器を特徴的に伴う遺跡がみられる。これは関東地方に広がり、特異な組成であることから、分析単位を比較的容易に抽出することができる。しかも、黒曜石を多用しており、その産地推定分析も行われ

ていることから、産地ごとの石器製作・運用技術の検討を通じて、狩猟採集民の移動・居住形態に迫ることができる。本稿では、小型尖頭器と掻器を伴う遺跡を分析の俎上に上げ、それを残した「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的な行動について予察してみたい。

1　議論の背景

「月見野期」（佐藤 1969）と称される時期のナイフ形石器は、小型化、幾何学形化、あるいは細石器化すると認識されている（鈴木・矢島 1979、織笠 1979、諏訪間・堤 1985、鈴木 1986、白石 1995・2003）。

また、先行する砂川期で客体的に存在していた尖頭器は、石器組成に占める割合が高くなり、ナイフ形石器と技術形態的に類似するようになる。さらに、「月見野期」以後、細石刃石器群が出現する。ナイフ形石器に文化史的・発展段階論的な意味を与え、その型式学と技術分析から得られた考古学的「文化」の時空間配置を調べる文化史研究において、この時期が「ナイフ形石器文化終末期」と名付けられた所以である（神奈川考古同人会 1979・1980）。

1980 年代になると、層位的な条件に恵まれ、良質な資料が多くみられる相模野台地を中心に、当該期の石器群の編年研究と石器製作技術の分析が進む（諏訪間・堤 1985、栗島 1986、鈴木 1986・1989、樫田 1987、織笠 1987、諏訪間 1988・1989）。

諏訪間順は、旧石器時代から縄文時代草創期までの石器群の層位的出土例を検討し、特定の器種の出現を指標とする段階的変遷観を示した。「ナイフ形石器文化終末期」は、石刃製石器の減少と、尖頭器の増加をもって「段階 VII」とされた（諏訪間 1988）。

この段階の特徴として、以下のことが挙げられる（諏訪間 1988・2001）。石材に黒曜石が多用される。石器組成はナイフ形石器、尖頭器、掻器、削器、彫器、石錐等から構成されるが、ナイフ形石器と尖頭器の数量の差が遺跡ごとに大きく、加工具類が少ない。ナイフ形石器には涙滴形、幾何学形、二側縁加工の縦長形態がある。尖頭器はナイフ形石器に技術形態的に類似した両面・半両面・片面加工品が認められる。剥片剥離技術は、寸詰まりの剥片を剥離するものが主体となる。

ところで、この時期の関東・中部地方には、小型の尖頭器と掻器を特徴的に伴う遺跡がある。代表例に、東京都仙川遺跡（小田 1974）が挙げられる。黒曜石を多用し、ナイフ形石器と技術形態的に類似する尖頭器が多いという特徴は、前述の「段階 VII」と、尖頭器の比率が高くなる「段階 VIII」の中間的な様相であることから、ながらく編年的位置づけが難しかった。

近年、神奈川県田名向原遺跡（麻生編 2003 等）をはじめ、相模野台地で類似する石器群が発見されている。それらは、出土層位がＢ１層上部を中心とすること、黒曜石を主体的に利用すること、涙滴形や幾何学形のナイフ形石器、小型の片面・半両面加工尖頭器が主体となることから、「段階 VII」に位置づけられることが、研究者間で概ね共有されている（加藤 1993、上敷領 1997、舘野編 1999、麻生 2003、白石 2004、島田 2005）。

しかし、「段階 VII」に位置づけられるとすると、新たな問題が浮上する。すなわち、小型尖頭器と掻器が特異なセットをなして残されるという石器の組み合わせ（佐藤 2004）が、複数の遺跡の内容を総合して構築された、「段階 VII」の前述の特徴に埋没してしまっていることである。

近年は、「ナイフ形石器文化終末期」の遺跡間の変異を行動論的に捉えようと試みられている（国武 1999・2000、鈴木 2003、島田 2008）。ただし、これらの研究は、刺突具であるナイフ形石器と尖頭器の製作・運用に関わる分析を中心に

据えている。小型尖頭器と掻器を伴う遺跡が形成された背景を探るためには、尖頭器とナイフ形石器だけではなく、その他の加工具を含めた石器群全体の石器製作・運用技術の分析が必要と考える。

2　資料の設定と分布

まず、本稿で取り上げる小型尖頭器と掻器を伴う遺跡について、技術形態的に定義しておく。

小型尖頭器は、長さ 2.5 ～ 3.5cm、幅 1 ～ 2 cm で長幅比 1 ： 1 ～ 1 ： 2 の片面もしくは半両面加工品を典型とする。素材剥片の打点部側を基部とし、両側縁から器体の中軸に及ぶ急斜度加工を施すため、断面は甲高となる。裏面加工は、主に打瘤の厚みを除去するために行われる。平面形は、最大幅が器体中央部付近にある木葉形を基本とするが、より基部に近い位置にある涙滴形もみられる。

掻器は、尖頭器と同じく、素材剥片に面的もしくは周縁加工し、端部に急斜度加工を施して緩やかに湾曲する刃部を作り出す。素材剥片の打点部側を基部とし、折断もしくは調整加工により厚みを除くものもある。サイズは、長さ 2.0 ～ 3.5cm、幅 1.5 ～ 2.5cm によくまとまる。尖頭器と掻器は、素材剥片の用い方、調整加工、サイズについて、形式を超えた共通性を持つ。

こうした尖頭器と掻器が、それぞれトゥール全体の 10％程度以上みられる遺跡もしくは石器集中部を、小型尖頭器と掻器を伴う遺跡として抽出する。

現在のところ、こうした遺跡は関東・中部地方に 8 つ確認することができる（第 1 図）。

武蔵野台地の東京都仙川遺跡（小田 1974）、多摩丘陵の東京都多摩ニュータウン No.496 遺跡第 1 文化層第 1 ・ 2 ・ 4 ユニット（舘野編 1999）、下総台地の千葉県西の台遺跡ユニット 1 ～ 5（道澤 1985）、同内田端山越遺跡（クラブハウス地点）（松田他 2008）、同大網山田台遺跡 No. 1 地点（田村編 1994）と、南関東に広く分布する。飛び地的に、群馬県広間地西遺跡（軽部・小原 2013）の赤城山麓や、長野県上ノ原遺跡 IVA 石器群ブロック 6（中村・森先編 2008）、同西岡 A 遺跡ブロック 11（土屋・大竹編 2000）等の野尻湖周辺に点在する。現時点では、小型尖頭器と掻器がまとまって出土する遺跡は、信州や箱根、高原山の黒曜石原産地周辺には確認されず、そこから離れた南関東の台地や、赤城山麓、野尻湖周辺の丘陵に分布する。

なお、東京都木曽森野遺跡第 II 文化層（加藤 1993）、長野県鷹山 I 遺跡 S 地点（戸沢・安蒜 1991）、同西の腰 B 遺跡（花田・林 1992）では、小型尖頭器がまとまって出土（採集）しているにもかかわらず掻器がほとんどみられない。

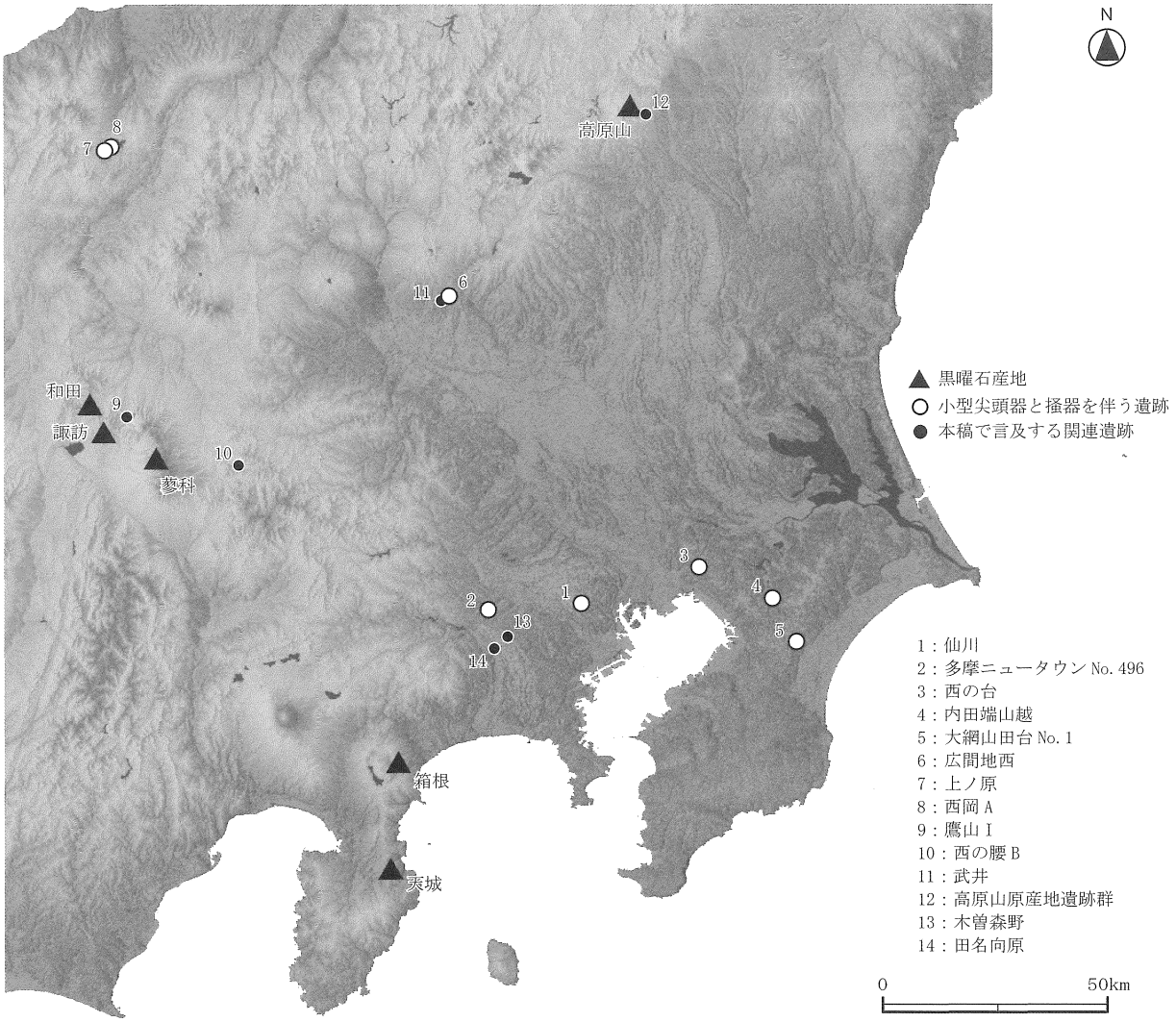
また、神奈川県田名向原遺跡 No. 4 住居状遺構やその周辺の地点（麻生編 2003 等）は、小型尖頭器と掻器を持つが、より多様な組成を有する。群馬県武井遺跡（寄居山地区・峯岸地区）（杉原 1977、笠懸野岩宿文化資料館編 2004 等）も同様である。これらは、小型尖頭器と掻器を伴う遺跡には含めない。

3　小型尖頭器と掻器を伴う遺跡における石器製作・運用技術

当該遺跡は黒曜石原産地から離れた範囲（70 ～ 150km）に分布するが、それでありながら黒曜石を多用している。この傾向は、「ナイフ形石器文化終末期」集団の移動・居住形態をみる上で、興味深い事例である。

以下では、各遺跡の組成、石器製作技術、産地推定に基づく黒曜石の利用状況について分析し、黒曜石を中心とした石器製作・運用技術の諸特質を抽出する。

基礎的なデータについては、第 1 表に各遺跡の組成、第 2 表に黒曜石産地構成（註 2）、第 3 表に産地別の器種構成をそれぞれ示した。



第１図　小型尖頭器と掻器を伴う遺跡および本稿で言及する関連遺跡の位置

3―1　仙川遺跡

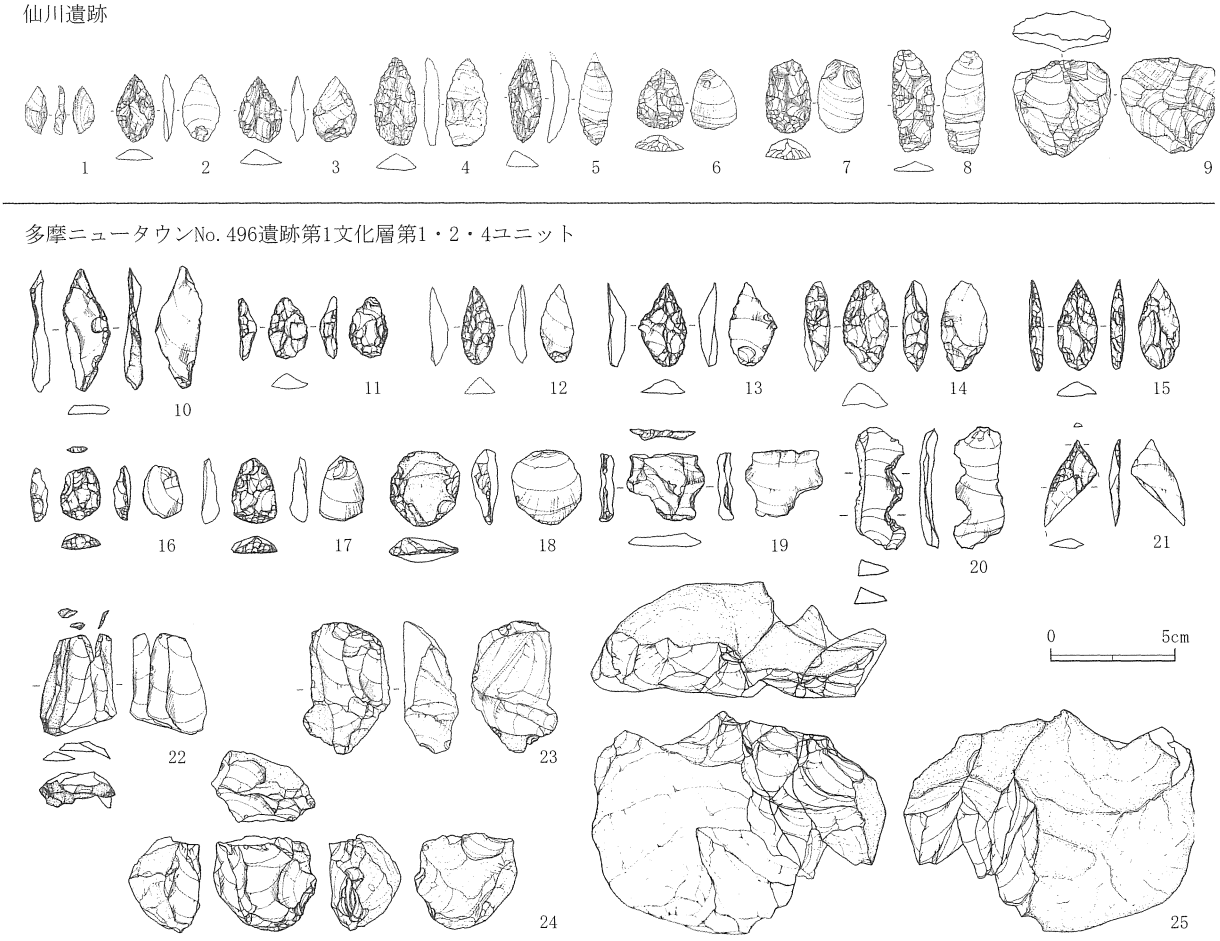
１箇所の石器集中から、石器 2308 点が出土している。これに重なるように、礫 231 点が分布する。石材は黒曜石が大半を占め（97.7％）、その他にチャート、頁岩等がわずかにみられる。

黒曜石のうち 861 点を試料とし、和田産 172 点（20.0％）、諏訪産 689 点（80.0％）の産地推定結果が得られていることから、黒曜石の多くが信州産と想定される。

トゥールは尖頭器(第２図: ２～５)を主体とし、その他に掻器（６・７）、削器類（８）が目立つ。ナイフ形石器は、幾何学形である（１）。

黒曜石剥片のうち、長さ・幅 2.0cm 未満の細片が 80％以上（約 1700 点）を占める。少ないながら石核が出土しており、求心状に剥片を剥離するもの（９）と、打面と作業面を適宜入れ替えながら小型剥片剥離を行う多面体石核がある。前者からは尖頭器や掻器の素材を得たと考えられ、削器類と石核の接合資料もある。後者は主に幾何学形のナイフ形石器の素材や小型刃器として利用された可能性がある。

遺跡では、信州産の黒曜石を用いて集中的に石器を製作していたことが窺われる。



第２図　武蔵野台地と多摩丘陵の遺跡

3―2　多摩ニュータウン No.496 遺跡第１文化層第１・２・４ユニット

３箇所の石器集中から、石器 8191 点が出土している。各石器集中部に、小規模な礫群がそれぞれ伴う。石材は、黒曜石が 90％以上を占める。その他に、凝灰岩やホルンフェルス等がある。

トゥールは、尖頭器（第２図：11 ～ 15）が卓越する。その他に、主に掻器（16 ～ 18）、石錐（21）、削器類（19・20）が伴う。ナイフ形石器は、基部・先端部加工や幾何学形のものがわずかにみられる（10）。

黒曜石剥片のうち、長さ・幅 1 cm 未満の細片が大半を占めることから、トゥールの調整加工に関わる作業が主体的に行われたと考えられる。それより大きな剥片（約 100 点）と石核（10 点）、剥片同士の接合資料（22）があることから、素材生産もある程度行われていたことが窺われる。

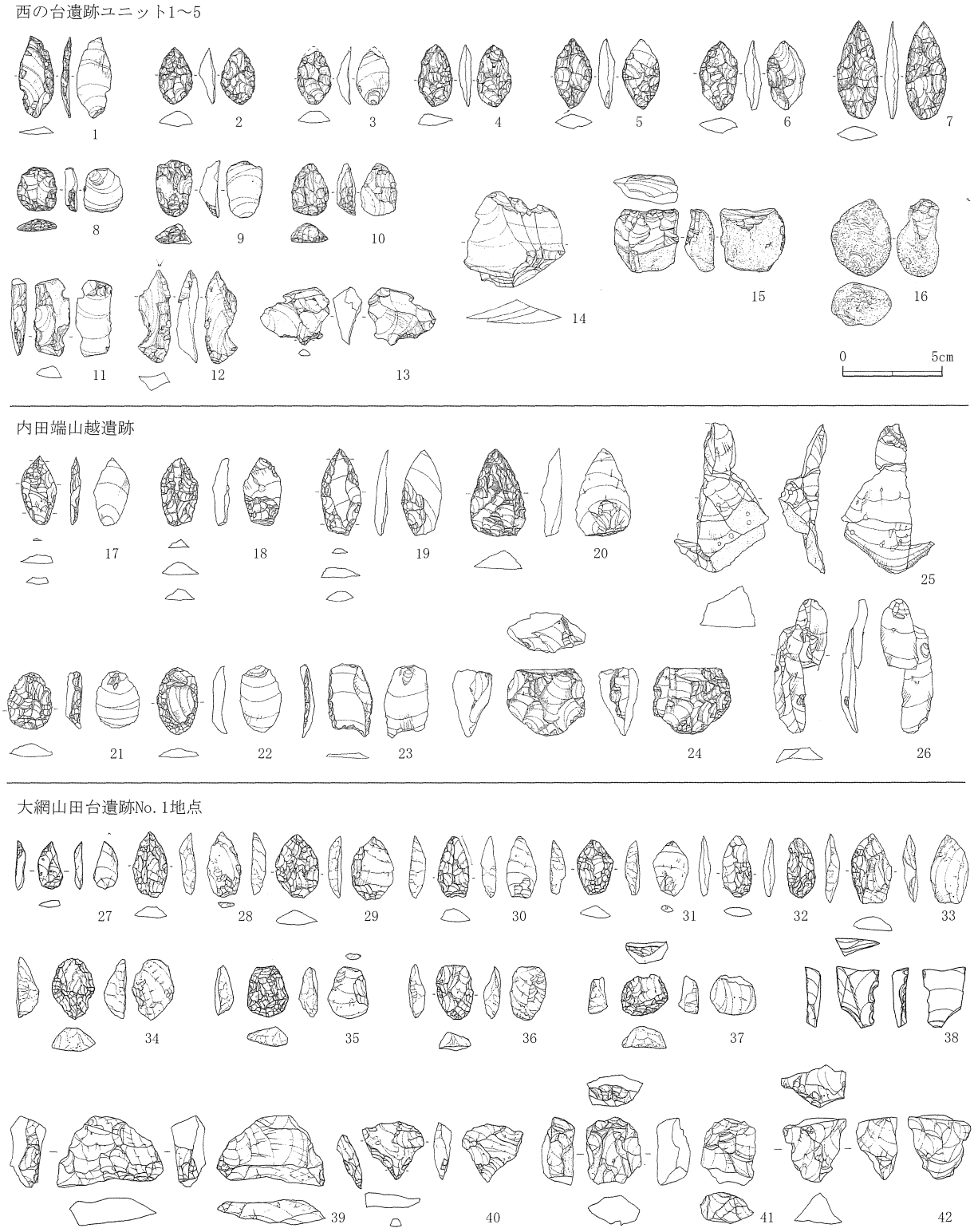
石核は相対的に小型で、自然面もしくは一回から数回の剥離で形成された面を打面として固定し、打点を左右に移しながら、寸詰まりの剥片を剥離した痕跡を残すものが多い（23・24）。作業面は一面に固定され、剥片剥離の進行に伴って後退し、その結果残核は扁平になる。

また、ブロック状の原石も出土しており、サイズは長さ 5.0cm、幅 3.5cm、厚さ 2.5cm である。原石と石核の大きさは概ね一致しており、ここではこのような小型原石を用いた剥片剥離作業が行われていたと推測される。

つまり、黒曜石製の石核が小型であるのは、石材の節約的な運用の結果ではなく、その素材の大きさに起因すると考えられる。黒色・透明で夾雑物をほとんど含まない黒曜石が多いことから、信

州産が多用されたと想定される。

遺跡に信州産黒曜石の小型原石、石核、素材剥片やトゥールを持ち込み、遺跡では素材生産を小規模ながら行いつつ、トゥール製作・使用が中心的な作業であったと考えられる。凝灰岩やホルンフェルスを用いた大型・厚手の横長剥片剥離も行われているが、トゥールの素材にはほとんど利用されていない（25）。



第３図　下総台地の遺跡

3―3　西の台遺跡ユニット１～５

５箇所の石器集中から、石器 4598 点が出土している。石材は、黒曜石が全体の 99.6%（4581 点）を占める。

トゥールは、小型の尖頭器（第３図：２～７）が主体となる。その他に掻器（８～ 10）、彫器（12）、削器類（11）、石錐（13）がある。縦長剥片素材の二側縁加工ナイフ形石器も伴う（１）。

黒曜石剥片うち、長さ・幅 1 cm 未満の細片が 90%以上（約 4400 点）である。それより大きな剥片（約 100 点）もみられ、自然面を残すものも含む。扁平石核（15）と原石（16）が少ないながら出土し、トゥール素材となりうる剥片同士の接合資料（14）もある。遺跡では、トゥールの調整加工に関わる作業を中心に、小規模ながら素材生産も行われたと考えられる。

黒曜石は、黒色・透明で夾雑物をほとんど含まないものが多い。そのうち 19 点を試料とし、すべて和田産の産地推定結果が得られている。尖頭器 15 点（１～７）、ナイフ形石器１点（１）、掻器１点（８）、石核１点（15）、原石１点（16）を含む。和田産により、素材生産から尖頭器をはじめとしたトゥール製作までの一連の作業が行われたことを示唆する。

3―4　内田端山越遺跡（クラブハウス地点）

３箇所の石器集中から、石器 606 点が出土している。石器集中と重なるように、礫 41 点が遺存し、２箇所の小規模な礫群が伴う。石材は、黒曜石が 95.9%（581 点）を占める。その他にチャート、頁岩等がわずかにみられる。

トゥールは尖頭器（第３図：17 ～ 20）が多く、その他に掻器（21・22）、石錐、削器類（23）がある。

黒曜石剥片が 90%以上（569 点）を占める。これには、長さ・幅 1 cm 未満の細片が 300 点ほど含まれる。求心状に剥片を剥離した石核（24）や多面体石核が少ないながらもみられ、石刃・縦長剥片同士の接合資料もある（25・26）。遺跡では、トゥールの調整加工に関わる作業を中心に、多様な形態の剥片が剥離されたことが窺える。

主体となる黒曜石のうち 203 点を試料とし、和田産 174 点（90.2%）、高原山産 19 点（9.8%）、判別不可 10 点の産地推定結果が得られている。和田産は尖頭器 10 点（17 ～ 20）、掻器７点（21・22）、ナイフ形石器１点、彫器１点、削器類３点（23）、剥片類 138 点（25・26）、石核１点（24）、原石１点を含む。高原山産は尖頭器１点、掻器１点、剥片 17 点である。和田産を集中的に消費し、素材生産からトゥール製作までの一連の作業が行われたことを示唆する。高原山産では、トゥール製作が小規模に行われた可能性がある。

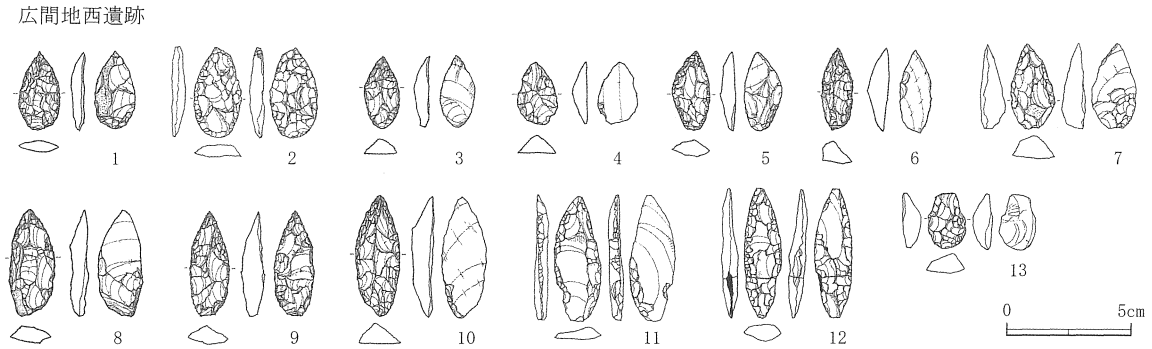
3―5　大網山田台遺跡 No. 1 地点

石器 1991 点が直径 20 m の範囲に分布する。これと重なるように、礫 236 点が遺存し、３箇所の小規模な礫群が伴う。石材は、黒曜石が約 90%（1969 点）を占める。その他に頁岩、チャート等がわずかにみられる。

トゥールは、小型の尖頭器（第３図：28 ～ 33）が卓越する。その他に掻器（34 ～ 37）、削器類（38）が目立つ。ナイフ形石器は、幾何学形のものがわずかに伴う（27）。

黒曜石剥片のうち、長さ・幅 1.5cm 未満の細片が約 80%（1500 点以上）を占める。それより大きな剥片（200 点以上）と石核もわずかにみられる。石核は、小型の剥片を剥離した多面体のものが多い（41・42）。遺跡では、主にトゥールの調整加工に関わる作業と、小規模ながら素材生産も行われたと考えられる。

黒曜石は、黒色・不透明で、白色の斑晶を含むものが多い。黒曜石のうち 31 点を試料とし、高原山産 30 点（96.8%）、和田産１点（3.2%）の産地推定結果が得られている。高原山産は尖頭器



第４図　赤城山麓の遺跡

15点（27～33）、掻器５点（34～37）、削器類１点（39）、剥片８点、石核１点（41）を含む。高原山産を用いて、素材生産からトゥール製作までの一連の作業が行われたことが示唆される。和田産は、削器類１点（38）である。

３―６　広間地西遺跡

本報告が待たれるところであるが、ここでは軽部・小原（2013）、建石他（2013）、および筆者の資料実見で得た所見に基づいて分析する。

出土遺物は4000点以上にのぼる。石材は黒曜石を主体とし、チャートも比較的多く利用されている。その他に、安山岩、頁岩もある。

トゥールは、尖頭器と掻器が卓越し、ナイフ形石器、彫器、削器類が伴うようである。小型尖頭器には黒曜石製（第４図：１～５）だけでなくチャート製（６・７）も含まれる。掻器（13）はほとんどが黒曜石である。また、頁岩やチャート、安山岩製には、柳葉形の尖頭器も認められる（10～12）。

剥片には長さ・幅２cm未満の細片が目立つことから、遺跡では主にトゥールの調整加工に関わる作業が行われたと考えられる。石核も少ないながらみられる。

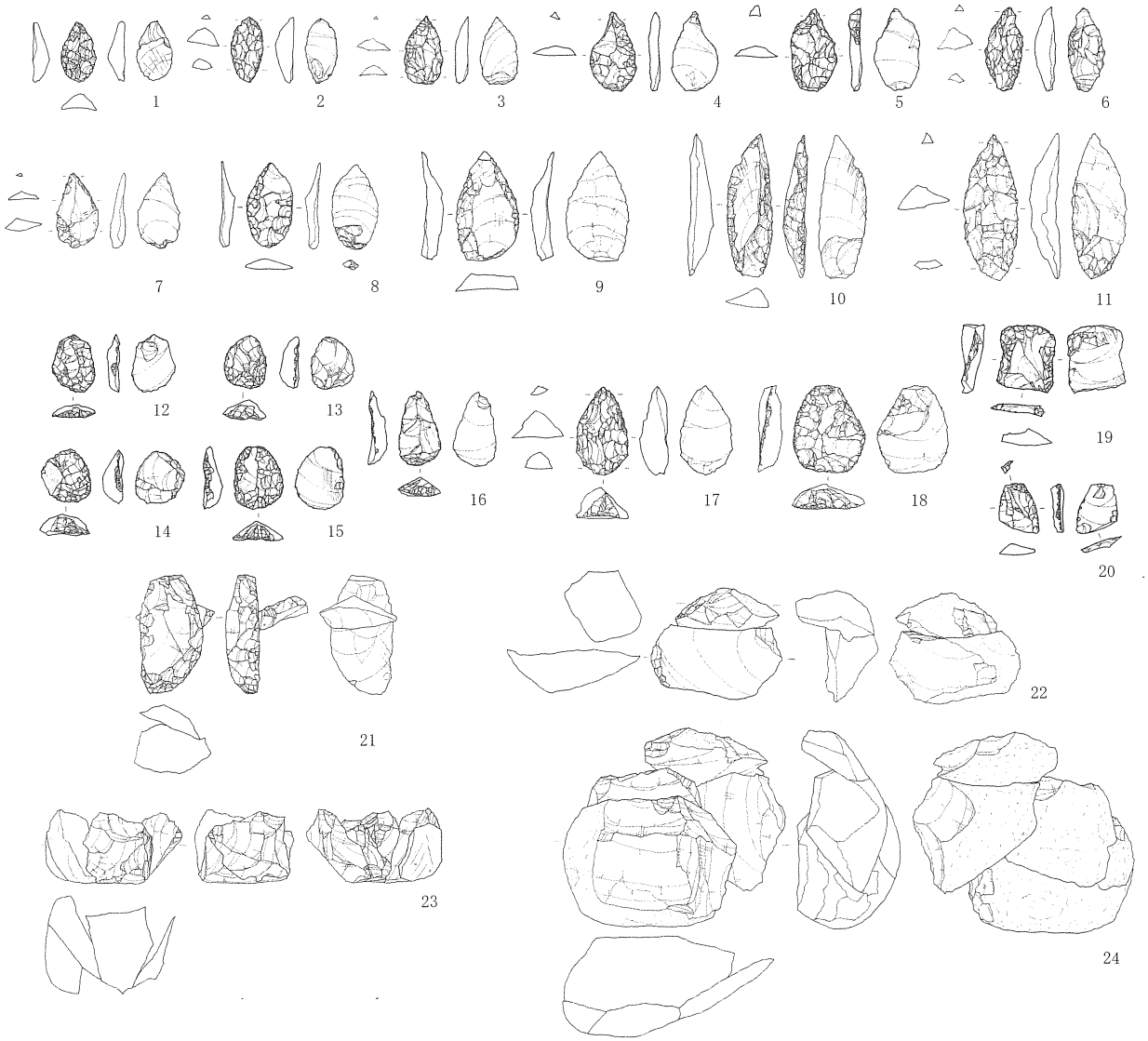
主体となる黒曜石のうち100点（このうち細石刃核１点を除く99点）が産地推定分析され、和田産56点（56.0%）、蓼科産29点（29.0%）、諏訪産11点（11.0%）、高原山産２点（2.0%）、判別不可１点の結果が得られている。器種ごとにみると、和田産は尖頭器28点（１・３・９）、掻器27点となり、諏訪産では尖頭器６点（４）、掻器５点、蓼科産では尖頭器11点（５）、掻器18点、そして高原山産では尖頭器１点、掻器１点である。いずれの黒曜石においてもトゥール製作が行われたことが示唆されるが、主体となる和田産は尖頭器と掻器がほぼ同数なのに対して、補助的に利用されている蓼科産は掻器の占める割合が高いという特徴を持つ。

３―７　上ノ原遺跡ⅣA石器群ブロック６

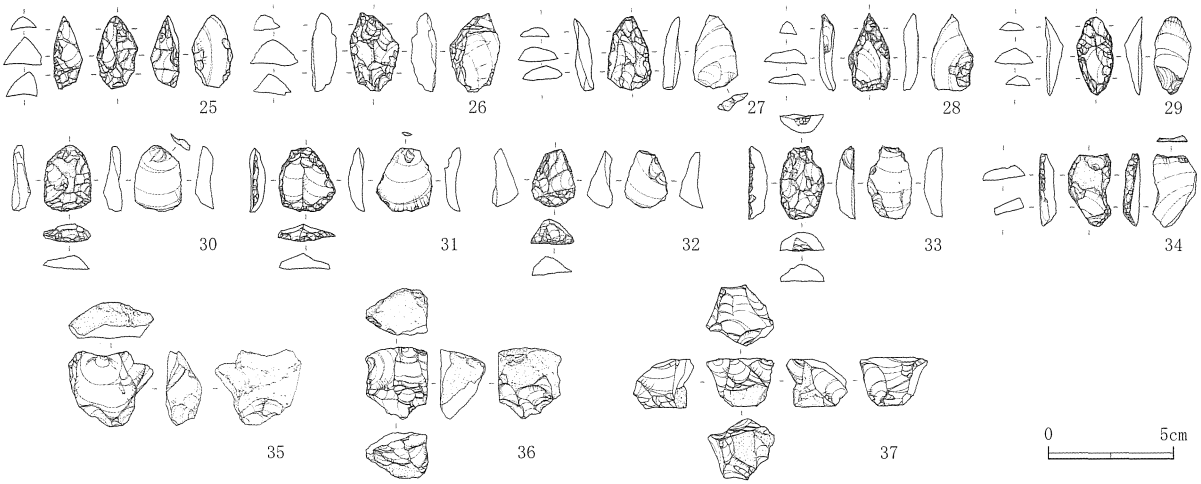
石器706点が出土している。石材は黒曜石をはじめ、安山岩、頁岩、チャート、凝灰岩と多様である。トゥールの主体である尖頭器は、黒曜石製の小型片面加工品（第５図：１～６）と類似した形態のものが、頁岩（８）、その他（碧玉、玉髄）（７・９）にもみられる。頁岩と安山岩には縦長剥片素材の周縁・半両面加工の柳葉形のものも伴う（10･11）。また、小型の掻器は黒曜石（12～16）だけでなく、頁岩（17）、チャート（18）にも認められる。

黒曜石剥片には、長さ・幅２cm未満のものが多く、石器集中部には同じく１cm未満の細片も多量にみられる。また、背面が多方向の剥離面から構成され、縦断面が湾曲している尖頭器調整剥片と思われるものが161点みられる。尖頭器をはじめとしたトゥールの調整加工に関わる作業が

上ノ原遺跡IVA石器群ブロック6



西岡A遺跡ブロック11



第５図　野尻湖周辺の遺跡

第１表　各遺跡の組成

遺跡名	地域	石器集中部	石材	尖頭器（未成品含む）	ナイフ形石器	掻器	削器類※1	彫器	石錐	剥片類※2	石核	礫器	原石	礫	合計	備考	文献
仙川遺跡	武蔵野台地	1	―	23	12	11	44			1974	13	1		231	2308		小田1974
				黒曜石2031、頁岩12、チャート35、安山岩8、その他222													
多摩ニュータウンNo.496遺跡 第1文化層第1・2・4ユニット	多摩丘陵	3	黒曜石	53	4	10	24	1	12	<8071	<10		1		<8186		舘野編1999
			凝灰岩							○	○				○		
			チャート				1								1		
			その他							○	○	4		146	>150		
			合計	53	4	10	25	1	12	8071	10	4	1	146	8337		
西の台遺跡ユニット1～5	下総台地	5	黒曜石	34	1	7	5	3	1	4528	1		1		4581		道澤1985
			頁岩							1					1		
			チャート	1		1				13					15		
			その他									1			1		
			合計	35	1	8	5	3	1	4542	1	1	1		4598		
内田端山越遺跡	下総台地	3	黒曜石	11		9	4	1	1	514	3				543		松田他2008
			頁岩							2					2		
			チャート			1	1			20				10	32		
			安山岩							1					1		
			その他											31	31		
			合計	11		10	5	1	1	537	3			41	609		
大網山田台遺跡No.1地点	下総台地	1	黒曜石	29	3	4	19		2	1903	8	1			1969		田村編1994
			頁岩		1		1			2					4		
			チャート			1				13					14		
			その他							3		1		236	240		
			合計	29	4	5	20		2	1921	8	2		236	2227		
広間地西遺跡	赤城山麓	?	-	160	11	67	32	2		約4200	8	10		22		細石刃核1点を除く	軽部・小原2013
				黒曜石を主体とし、チャート、安山岩、頁岩等がみられる													
上ノ原遺跡 IVA石器群ブロック6	野尻湖周辺	1	黒曜石	30		29	4	3		300	2		1		369		中村・森先編2008
			頁岩	8		3				71	9		1		92		
			凝灰岩	1			2			16	2				21		
			チャート			3	1			27	6				37		
			安山岩	14		2	3			139	2				160		
			その他	4		1				22					27		
			合計	57		38	10	3		575	21		2		706		
西岡A遺跡ブロック11	野尻湖周辺	1	黒曜石	13		7	23			142			4		189	台形様石器1点、角錐状石器2点を除く	土屋・大竹編2000
			頁岩				2			3			1		6		
			凝灰岩							2					2		
			チャート				1			5					6		
			安山岩		2					12					14		
			その他				1								1		
			合計	13	2	7	27			164			5		218		

※1削器類は、削器、抉入石器、鋸歯縁石器である。
※2剥片類は、二次加工石刃・剥片、微小剥離痕を有する石刃・剥片、石刃、剥片、細片である。

第２表　黒曜石の産地別構成

地域	遺跡	総数	分析試料										分析法	文献
			合計	和田		諏訪		蓼科		高原山		判別不可		
				点数	%	点数	%	点数	%	点数	%			
武蔵野台地	仙川遺跡	2078	861	172	20.0%	689	80.0%		0.0%		0.0%	0	蛍光X線分析	Suzuki1974
下総台地	西の台遺跡ユニット1～5	4598	19	19	100.0%		0.0%		0.0%		0.0%	0	蛍光X線分析	ニ宮・島立2002
	内田端山越遺跡	647	203	174	85.7%		0.0%		0.0%	19	9.4%	10	蛍光X線分析	杉原他2008
	大網山田台遺跡No.1地点	1991	31	1	3.2%		0.0%		0.0%	30	96.8%	0	蛍光X線分析	ニ宮・島立2002
赤城山麓	広間地西遺跡	4545	100	56	56.0%	12	12.0%	29	29.0%	2	2.0%	1	蛍光X線分析	建石他2013
野尻湖周辺	上ノ原遺跡IVA石器群ブロック6	706	39	22	56.4%	11	28.2%	6	15.4%		0.0%	0	蛍光X線分析	藁科2008
	西岡A遺跡ブロック11	218	128	102	79.7%	13	10.2%	12	9.4%	1	0.0%	0	蛍光X線分析	望月・邊見2000

第３表　黒曜石産地別の器種構成

地域	遺跡	産地	合計	尖頭器	ナイフ形石器	掻器	削器類	剥片類	石核	原石	その他	不明
武蔵野台地	仙川遺跡	和田	172									172
		諏訪	689									689
下総台地	西の台遺跡ユニット1～5	和田	19	15	1	1			1	1		
	内田端山越遺跡	和田	174	10	1	7	4	138	3	1		
		高原山	19	1		1		17				
	大網山田台遺跡No.1地点	和田	1				1					
		高原山	30	15		5	1	8	1			
赤城山麓	広間地西遺跡	和田	56	28		27			1			
		諏訪	11	6		5					1	
		蓼科	29	11		18						
		高原山	2	1		1						
野尻湖周辺	上ノ原遺跡IVA石器群ブロック6	和田	22	8		4	1	9				
		諏訪	11	1		8		2				
		蓼科	6			2	1	3				
	西岡A遺跡ブロック11	和田	102	13		8	13	66	2			
		諏訪	13			2	2	8	1			
		蓼科	12			3	2	6	1			
		高原山	1					1				

主体的に行われたことが窺える。

その一方、礫の自然稜を持つ厚手・縦長剥片や、自然面を残す大きな剥片等、石核の初期段階に剥離された剥片が少ないながらも確認される。多面体石核と原石も出土している。遺跡では、素材生産も小規模ながら行われたと考えられる。黒曜石以外の石材では、石核と剥片（23・24）、トゥール同士（21）、トゥールと剥片（22）の接合資料がある。

石材の多くを占める黒曜石のうち39点を試料とし、和田産22点（56.4％）、諏訪産11点（28.2％）、蓼科産6点（15.4％）の産地推定結果が得られている。器種ごとにみると、和田産は尖頭器8点（第5図：2・4・5・6）、掻器4点（12）、削器類1点（19）、剥片類9点となり、諏訪産では尖頭器1点（3）、掻器8点（14・16）、剥片類2点、そして蓼科産は掻器2点（13・15）、削器類1点（20）、剥片類3点である。いずれの黒曜石においてもトゥール製作が行われたことが示唆されるが、前述した広間地西遺跡と同じく、主体となる和田産では尖頭器をはじめ掻器、削器類がみられるのに対し、補助的に利用されている諏訪産と蓼科産では尖頭器が少なく掻器と削器類が多いことが特徴である。

3―8　西岡A遺跡ブロック11

石器218点が出土している。上ノ原遺跡と同じく、黒曜石をはじめ多様な石材がみられる。ブロック11を特徴づける小型尖頭器と掻器は、すべて黒曜石製で、非黒曜石石材はナイフ形石器や削器類に用いられている。

黒曜石剥片は、長さ・幅1cm未満の細片が大半を占めることから、トゥールの調整加工に関わる作業が主体であったと考えられる。多面体石核が伴い、しかもそれらに自然面が残ることから、原石もしくは分割礫からの素材生産も行われたことが窺われる。

石材の大半を占める黒曜石のうち128点を試料とし、和田産102点（79.7％）、諏訪産13点（10.2％）、蓼科産12点（9.4％）、高原山産1点（0.0％）の産地推定結果が得られている。器種ごとにみると、和田産では尖頭器13点（第5図：25～29）、掻器8点（30・31）、削器類13点（34）、剥片類66点、石核2点（35）となり、諏訪産では掻器2点（32・33）、削器類2点、剥片類8点、石核1点（37）、蓼科産では掻器3点（33）、削器類2点、剥片類6点、石核1点（36）、そして高原山産では剥片類1点である。信州の各産地の黒曜石では、素材生産からトゥール製作までの一連の作業が行われたことが示唆される。

また、上ノ原遺跡と同じく、主体となる和田産では尖頭器と掻器をはじめさまざまなトゥールがみられるのに対して、補助的に利用されている諏訪産と蓼科産では掻器と削器類だけが認められる。

4　小型尖頭器と掻器を伴う遺跡を残した集団の地域的行動の予察

前章で検討した、当該遺跡の石器製作・運用に関わる特質は、以下のようにまとめられる。

①それぞれの遺跡は、黒曜石を用いた集中的な石器製作・使用により形成された。黒曜石の他にいくつかの石材が補完的に利用されているが、広間地西遺跡と上ノ原遺跡を除くと数量は少ない。

②黒曜石は、武蔵野台地、多摩丘陵、下総台地西部、赤城山麓、野尻湖周辺では信州産が、下総台地東部では高原山産が集中的に消費され、下総台地中央部では信州産が多く用いられつつ、高原山産もある程度みられる。また、野尻湖周辺、赤城山麓では、信州の和田、諏訪、蓼科の各産地の黒曜石が利用されており、武蔵野台地でも和田産と諏訪産が用いられるが、下総台地では和田産だけである。

③トゥールは尖頭器と掻器を主体とし、彫器、石錐、削器類がみられる。これらは、石核消費の各過程で剥離される多様な形態の剥片を素材としている。

④南関東では、各産地の黒曜石から尖頭器を中心に掻器を含む各種トゥールが製作されている。一方、野尻湖周辺と赤城山麓では、南関東と同じく、尖頭器をはじめさまざまなトゥールに和田産が利用されているが、補助的に利用されている諏訪産や蓼科産には尖頭器がほとんどなく、掻器や削器類が多くみられる。

⑤各遺跡を構成する石器集中部はそれほど多くないが、仙川遺跡、多摩ニュータウン No.496 遺跡、内田端山越遺跡、大網山田台遺跡 No. 1 地点には、小規模とはいえ礫群が伴う。

前述したように、小型尖頭器と掻器を伴う遺跡は、「ナイフ形石器文化終末期」に位置づけられる。これとよく似た組成を持つ同時期の遺跡には、田名向原遺跡 No. 4 住居状遺構、木曽森野遺跡第 II 文化層、武井遺跡（寄居地区・峯岸地区）、鷹山 I 遺跡 S 地点、西の腰遺跡等がある。また、黒曜石製の小型片面加工尖頭器および技術形態的に類似したナイフ形石器は、当該期の関東・中部高地の石器群にしばしばみられる。

したがって、小型尖頭器と掻器を伴う遺跡は、中部高地以南に分布の中心があったと考えられる（尾田 2008、岩瀬 2010、森先 2010）。

小型尖頭器と掻器を伴う遺跡を残した集団は、信州産もしくは高原山産の黒曜石を用いて、主に尖頭器と掻器を集中的に製作・使用した。尖頭器は刺突具、掻器は皮なめしの加工具としての利用が中心であったと考えられることから、それぞれの遺跡の周辺では活発な狩猟活動とそれに伴う加工作業が重点的に行われたことが示唆される。小規模ながら礫群が伴っていることから、彼らは遺跡に一定期間滞在したと考えられるが、石器集中部が少ないことからその利用は限定的であった（繰り返し利用されたわけではない）と考えられる。

「ナイフ形石器文化終末期」の南関東の各地域集団は、生業活動上の拠点的な場所から一定範囲に分布する食料資源を獲得していたという想定に基づくなら（国武 2000・2005）、小型尖頭器と掻器を伴う遺跡はそれらを用いて特定の作業を集中的に行う兵站的な地点であった可能性がある。特に、信州産黒曜石が相対的に多く供給されていた武蔵野台地、多摩丘陵、下総台地西部から、高原山産黒曜石が多くみられる下総台地東部を中心に形成された機能的単位と考えられる。

この時期は最終氷期最盛期（LGM：約 2.5 ～ 1.6 万年前（Lambeck et al. 2002、Yokoyama et al. 2007））の末期に相当し、依然として寒冷・乾燥な気候であったことが、関東・中部地方の各地の花粉分析から推定されている（鈴木他 1993、公文 2003・2009、辻 2004、西内他 2015）。森林限界は標高 1,300 m付近と想定されている。これは和田黒曜石原産地に近接する鷹山 I 遺跡 S 地点（戸沢・安蒜編 1991）や、高原山に残された剣ヶ峯地区の遺跡（田村・国武 2006）の標高と一致することから、当時の中部高地と高原山の黒曜石原産地遺跡の多くが森林限界線の付近にあったことを示唆する。そこは草地と裸地が広がる開けた景観で、土壌浸食が活発なことから、多くの黒曜石の岩屑と角礫が露出していたと考えられる（田村 2005、Yoshida et al. 2015）。通年居住は困難で、中部高地や高原山の黒曜石の調達とそれに伴う活動は、夏季が中心であったと想定される。小型尖頭器と掻器を伴う遺跡は、日常的なものはもとより、南関東からこれらの特定の黒曜石を調達しに行くための装備を重点的に整える場として機能していたのではないだろうか。

ところで、野尻湖周辺と赤城山麓では、補助的に利用されている産地（諏訪産・蓼科産）の黒曜石に掻器や削器類が目立つ。一般的に、生業活動にもっとも重要なものは刺突具と考えられることか

ら、中部高地において複数の産地の黒曜石を直接に調達してまわったとすると、先に赴いた産地の黒曜石から製作した尖頭器を携行し、新たに調達した黒曜石からさまざまなトゥールを補給する行動が想定されるが、ここでは逆に掻器や削器類が管理的に運用されていたかのようなパターンを示す。小型尖頭器と掻器を伴う遺跡において、掻器や削器類は、諏訪産や蓼科産だけではなく和田産や高原山産からも製作されていることから、黒曜石の質がその機能に関わっていたとは考え難い。

前述したように、野尻湖周辺の小型尖頭器と掻器を伴う遺跡は中部高地以南の文化系統である。赤城山麓は、中部高地や高原山と南関東を結ぶ基幹的な移動経路上にあることから（堤 2003a、国武 2015 等）、関東・中部高地系に含まれると考えられるが、その外縁に位置する。この時期の野尻湖周辺には、新潟県真人原遺跡に類似した石刃技法と尖頭器を持つ野尻湖以北の石器群がみられ、関東・中部高地系の石器群と共存している（岩瀬 2009・2010、森先 2010）。上ノ原遺跡 IVA 石器群の頁岩、凝灰岩、玉髄は、新潟県中部・北部（約 60 ～ 200km）方面（中村 2008）との関わりを示唆する。

また、赤城山麓の広間地西遺跡に近接する武井遺跡では、各産地の黒曜石をはじめさまざまな石材から、多様な形態の尖頭器が製作されていることから、異なる文化系統の集団の結束点であった可能性がある（須藤 2013）。こうした系統を異にする複数の地域集団の並存は、当該期に野尻湖周辺や赤城山麓を介する地域社会間交流が活発であったことを示唆する。このような場所では、婚姻儀礼のような社会的な活動も行われたと想定される。掻器はジェンダー論の観点からも興味深いトゥールであるため（堤 2003b、高瀬 2009）、その特徴的な運用パターンから地域集団間の社会的な関係について論じる展望が開けるかもしれない。

おわりに

本稿では、小型尖頭器と掻器を特徴的に伴う遺跡を分析の俎上に上げ、関東・中部地方における「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的な行動について予察した。

こうした遺跡を残した集団は、その分布からみて中部高地以南の文化系統である。武蔵野台地や多摩丘陵、下総台地を主たる生業域としていた集団が、信州産と高原山産の黒曜石を用いて、狩猟活動とそれに伴う加工作業を重点的に行った。また、彼らが生業域の境界や外縁における地域集団間の社会的な活動にも関わっていた可能性を展望した（註３）。

今後は、関東・中部地方の「ナイフ形石器文化終末期」の編年を整備し、技術構造と移動・居住形態に関する分析を進め、小型尖頭器と掻器を伴う遺跡を残した集団の機能的・社会的な側面についてさらに追究していきたい。

脱稿後、広間地西遺跡の報告書が刊行されていたことを知った（飯田 2015）。本稿で対象とした資料は、「第３石器群」にあたる。遺物点数と組成の詳細は、そちらを参照されたい。また、和田産の黒曜石を用いた尖頭器２点、石核１点が他の石器群に属すると判断されており、黒曜石産地データも若干の修正を要する。ただし、本稿の内容に大きな影響を及ぼすものではなく、論旨に変更はない。

謝辞

森先一貴、岩瀬彬、中村由克の諸氏には、上ノ原遺跡（第５次・県道地点）の資料整理と報告書作成という貴重な機会を共にさせていただいた。本稿の内容は、そこでの議論を通じて着想を得たものである。記して謝意を表したい。

註１　本稿では、「ナイフ形石器文化終末期」は、武蔵野編年でいうところの「武蔵野 IIb 期後半」（田中 1979 等）、相模野台地の B1 層上部に代表される石器群である「月見野期」（佐藤 1969）、「相模野 IV 期後半」（諏訪間・堤 1985）、「相模野段階 VII」（諏訪間 1988）に相当する時期とする。また、「ナイフ形石器文化終末期」という用語は、上記のように呼称されてきた特定の時間幅の事象を指す意味でのみ用いる。ナイフ形石器を指標とした「石器文化」を仮想し、その「終末」にいたる過程を描き出すことを意図しているわけではない。

註２　中部高地の黒曜石産地は、それぞれ次のようにまとめた。Suzuki（1974）では、和田峠を和田、霧ヶ峰を諏訪とした。二宮・島立（2002）では、小深沢と男女倉を和田、星ヶ塔を諏訪、麦草峠を蓼科とした。杉原他（2008）では、和田峠・鷹山系と男女倉系を和田としてまとめ、西ヶ峰系を諏訪、冷山・麦草系を蓼科とした。建石他（2013）では、和田に小深沢と男女倉を含め、星ヶ塔を諏訪、麦草峠を蓼科とした。望月・邊見（2000）では、鷹山群、小深沢群、土屋橋北群、土屋橋西群、土屋橋南群、芙蓉ライト群を和田としてまとめ、星ヶ台群を諏訪、冷山群を蓼科とした。藁科（2008）では、和田鷹山・和田峠を和田、霧ヶ峰、観音沢を諏訪、麦草峠、冷山を蓼科とした。

註３　彼らが、「石器製作者集団」（安蒜 1997）に相当する可能性はあるが、本稿で述べたように、黒曜石の調達や社会的な活動など、それ以外にもさまざまな役割を担っていたと想定される。

引用・参考文献

麻生順司　2003　「田名向原遺跡における地点石器群及び住居状遺構出土石器群に関する考察」『田名向原遺跡 II』153―181 頁　相模原市教育委員会

麻生順司編　2003　『田名向原遺跡 I』　87 頁　相模原市教育委員会

安蒜政雄　1997　「旧石器時代の集団―南関東の移動生業集団と石器製作者集団―」『駿台史学』第 100 号　147―172 頁

飯田茂雄　2015　「広間地西遺跡の旧石器時代石器群」『新里地区遺跡群発掘調査報告 VI』　81―94 頁　160―165 頁　桐生市教育委員会

岩瀬　彬　2009　「信濃川流域とその周辺における部分調整尖頭器石器群にみられる縦長剥片剥離の技術的特徴と石器製作―真人原遺跡 A・B・C 地点を中心に―」『新潟県の考古学』II　23―38 頁

岩瀬　彬　2010　「野尻湖周辺における尖頭器石器群の分析単位に関する一考察」『考古学ジャーナル』No.598　19―22 頁

小田静夫　1974　『仙川遺跡』　49 頁　東京都教育委員会

尾田識好　2008　「上ノ原遺跡 IV 石器群に関する諸問題」『上ノ原遺跡（第 5 次・県道地点）発掘調査報告書』258―267 頁　信濃町教育委員会

織笠　明　1979　「ナイフ形石器と切出形石器」『神奈川考古』第 7 号　21―48 頁

織笠　明　1987　「相模野尖頭器文化の成立と展開」『大和市史研究』13　44―73 頁

笠懸野岩宿文化資料館編　2004　『第 12 回岩宿フォーラム／シンポジウム武井遺跡の槍先形尖頭器』　86 頁　笠懸野町教育委員会・新里村教育委員会・岩宿フォーラム実行委員会

樫田　誠　1987　「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第Ⅲ文化層のナイフ形石器と槍先形尖頭器」『大和市史研究』13　74―106 頁

加藤秀之　1993　「旧石器時代」『木曽森野遺跡 II』　23―52 頁　町田木曽森野地区遺跡調査会

神奈川考古同人会　1979　『ナイフ形石器文化終末期の問題』（『神奈川考古』第 7 号）　148 頁

神奈川考古同人会　1980　『ナイフ形石器文化終末期の問題（II）』（『神奈川考古』第 8 号）　130 頁

上敷領久　1997　「武蔵野台地における槍先形尖頭器の展開―特に野川流域の第 III 文化期について―」『生産の考古

学』10—20 頁　倉田芳郎先生古稀記念会
亀田直美編　2005 『シンポジウム「ナイフ形石器文化終末期」再考—ナイフ形石器文化終末期石器群の変動　—資料集成』(『石器文化研究』11)　458 頁　石器文化研究会
軽部達也・小原俊行　2013 「広間地西遺跡出土黒曜石資料の産地分析」『岩宿フォーラム 2013 ／シンポジウム　槍先形尖頭器文化の大規模集落と遺跡の広がり—武井遺跡発掘 60 周年—』　39—48 頁
国武貞克　1999 「石材消費と石器製作、廃棄による遺跡の類別—行動論的理解に向けた分析法の試み—」『考古学研究』第 46 巻第 3 号　35—55 頁
国武貞克　2000 「槍先形尖頭器をめぐる行動論」『考古学ジャーナル』No.465　12—15 頁
国武貞克　2003 「両面体調整石器群の由来—関東地方Ⅴ層・Ⅳ層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性—」『考古学』Ⅰ　52—77 頁
国武貞克　2005 「複数の時間的スケールを考慮した領域分析の試み」『石器文化研究』12　215—224 頁
国武貞克　2015 「黒曜石の獲得からみた関東・中部地方の移動領域」『旧石器研究』第 11 号　79—96 頁
公文富士夫・河合小百合・井内美郎　2003 「野尻湖湖底堆積物中の有機炭素・全窒素含有率および花粉分析に基づく約 25,000～6,000 年前の気候変動」『第四紀研究』第 42 巻第 1 号　13—26 頁
公文富士夫・河合小百合・井内美郎　2009 「野尻湖積物に基づく中部日本の過去 2.7 万年間の詳細な古気候復元」『旧石器研究』第 5 号　3 —10 頁
栗島義明　1986 「槍先形尖頭器石器群の研究序説—中部日本における地域的様相の把握—」『考古学研究』第 32 巻第 4 号　10—41 頁
栗原伸好・三瓶祐司編　2006 『シンポジウム「ナイフ形石器文化終末期」再考—ナイフ形石器文化終末期石器群の変動—　論攷・コメント集』(『石器文化研究』12)　297 頁　石器文化研究会
佐藤達夫　1969 「ナイフ形石器の編年的一考察」『東京国立博物館紀要』第 5 号　23—61 頁
佐藤宏之　1992 『日本旧石器文化の構造と進化』　362 頁　同成社
佐藤宏之　1995 「技術的組織・変形論・石材需給—下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察—」『考古学研究』第 42 巻第 1 号　27—53 頁
佐藤宏之　1997 「日本旧石器時代研究と居住形態論—関東地方後期旧石器時代前半期から後半期への移行を中心として—」『住の考古学』　2 —12 頁　同成社
佐藤宏之　2004 「末野と正面ヶ原Ｄ」『山下秀樹氏追悼考古論集』　25—34 頁　山下秀樹氏追悼論文集刊行会
島田和高　2005 「黒曜石・槍先形尖頭器・ナイフ形石器」『地域と文化の考古学』Ⅰ　421—439 頁
島田和高　2008 「黒曜石のふるまいと旧石器時代の住まい—月見野期と田名向原住居状遺構—」『旧石器研究』第 4 号　61—82 頁
白石浩之　1995 「関東地方におけるナイフ形石器文化終末期の様相—月見野期を中心として—」『古代文化』第 47 巻第 1 号　14—29 頁
白石浩之　2003 「ナイフ形石器文化終末期の石器群—いわゆる月見野期について—」『第 9 回石器文化研究交流会』47—52 頁
白石浩之　2004 「田名向原遺跡の石器群の評価について—Ａ地区№ 4 地点住居状遺構の出土遺物を中心として—」『田名向原遺跡Ⅱ』　183—208 頁　相模原市教育委員会
杉原重夫・金成太郎・太田陽介　2008 「千葉県佐倉市内田端山越遺跡出土黒曜石製遺物の産地推定」『内田端山越遺跡（第 2 分冊)』　648—657 頁　三菱地所株式会社・財団法人印旛郡市文化財センター
杉原荘介　1977 『群馬県武井遺跡における二つの旧石器文化』　明治大学
鈴木次郎　1986 「ナイフ形石器の終末と槍先形尖頭器石器群の出現—相模野第Ⅳ期石器群の構造的理解—」『神奈

川考古』第22号　79—102頁
鈴木次郎　1989「相模野台地における槍先形尖頭器石器群」『神奈川考古』第25号　27—55頁
鈴木次郎・矢島国雄　1979「相模野台地におけるナイフ形石器終末期の様相」『神奈川考古』第7号　1—20頁
鈴木尚史　2003「槍先形尖頭器の出現と変遷—相模野台地を中心に—」『駿台史学』第118号　59—80頁
鈴木正章・吉川昌伸・遠藤邦彦・高野　司　1993「茨城県桜川低地における過去32,000年間の環境変遷」『第四紀研究』第32巻第4号　195—208頁
須藤　隆　2013「赤城山麓に集う石槍狩猟民」『岩宿フォーラム2013／シンポジウム　槍先形尖頭器文化の大規模集落と遺跡の広がり—武井遺跡発掘60周年—』　70—79頁
諏訪間順　1988「相模野台地における石器群の変遷について—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—」『神奈川考古』第24号　1—30頁
諏訪間順　1989「ナイフ形石器文化の終焉と尖頭器文化の成立」『旧石器考古学』38　93—102頁
諏訪間順　2001「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』　1—20頁
諏訪間順・堤　隆　1985「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層の石器群について」『旧石器考古』30　85—108頁
高瀬克範　2009「皮革利用史の研究動向—皮革資源への「複眼的」接近のために—」『日本古代学』第1号　81—106頁
建石　徹・飯田茂雄・小菅将夫・加部二生・ニ宮修治　2013「広間地西遺跡出土黒曜石資料の産地分析」『岩宿フォーラム2013／シンポジウム　槍先形尖頭器文化の大規模集落と遺跡の広がり—武井遺跡発掘60周年—』　90—92頁
舘野　孝編　1999『多摩ニュータウン遺跡』　東京都埋蔵文化財センター調査報告第73集　588頁　東京都埋蔵文化財センター
田中英司　1979「武蔵野台地IIb期前半の石器群と砂川期の設定について」『神奈川考古』第7号　65—74頁
田村　隆　1992「遠い山・黒い石—武蔵野II期石器群の社会生態学的一考察—」『先史考古学論集』第2集　1—46頁
田村　隆　2005「この石はどこからきたか—関東地方東部後期旧石器時代古民族誌の叙述に向けて—」『考古学』III 1—72頁
田村　隆・国武貞克　2006「高原山産黒曜石原産地遺跡群の発見」『旧石器研究』第2号　93—110頁
田村　隆編　1994『大網山田台遺跡群Ⅰ—旧石器時代篇—』　418頁　株式会社エルカクエイ・東急建設株式会社・（財）山武郡市文化財センター
辻　誠一郎　2004「地球時代の環境史」『歴史研究の最前線Vol. 2　環境史研究の課題』　40—70頁　総研大日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館
土屋　積・大竹憲昭編　2000『貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』　304頁　日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
堤　隆　2003a「細石刃石器群の石材需給とセトルメントシステム」『シンポジウム日本の細石刃文化II—細石刃文化研究の諸問題—』　152—170頁
堤　隆　2003b「後期旧石器時代の石器群と寒冷環境への適応戦略」『第四紀研究』第42巻第3号　205—218頁
戸沢充則・安蒜政雄　1991『鷹山遺跡群II』　133頁　長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団
仲田大人　2006「細石刃石器群の出現とその構造的理解」『旧石器研究』第2号　111—126頁
中村由克　2008「上ノ原遺跡の石材とその原産地・採集地の推定」『上ノ原遺跡（第5次・県道地点）発掘調査報告書』　199—248頁　信濃町教育委員会
中村由克・森先一貴編　2008『上ノ原遺跡（第5次・県道地点）発掘調査報告書』　551頁　信濃町教育委員会
西内李佳・百原　新・遠藤邦彦・大里重人・沖津　進　2015「最終氷期最寒冷期末期の北関東丘陵域における古植生

分布―宇都宮市中里の植物化石群からの復元―」『第四紀研究』第 54 巻第 4 号　185―201 頁
二宮修治・島立　桂　2002 「蛍光Ｘ線による房総半島出土尖頭器石器群の黒曜石産地推定」『千葉県文化財センター研究紀要』22　65―100 頁
花田千代子・林　浩世　1992 「西の腰Ｂ遺跡『川上村誌　先土器時代編』 259―265 頁　川上村誌刊行会
三瓶祐司編　2005 『シンポジウム「ナイフ形石器文化終末期」再考―ナイフ形石器文化終末期石器群の変動―　予稿集』(『石器文化研究』12)　297 頁　石器文化研究会
道澤　明　1985 「先土器時代」『西の台（第２次)』 230―270 頁　船橋市遺跡調査会
望月明彦・邉見哲也　2000 「野尻湖遺跡群出土黒曜石の産地推定（II)」『貫ノ木遺跡・西岡Ａ遺跡　旧石器時代本文編』 269―280 頁　日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
森先一貴　2010 「野尻湖周辺のナイフ形石器群」『考古学ジャーナル』No.598　14―18
藁科哲夫　2008 「上ノ原遺跡出土黒曜石製遺物の産地分析」『上ノ原遺跡（第５次・県道地点）発掘調査報告書』信濃町教育委員会　232―248 頁

英語文献

Lambeck, K., Esat, T. M., and Potter, E. K. 2002 Limks between climate and sea level for the past three million years. *Nature* 419 pp.199-206
Suzuki, M. 1974 Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan, Part II-Time-space analysis of obsidian transportation. *Journal of the Faculty of Science*. The University of Tokyo, Sec. V 4 pp.395-469
Yokoyama, Y., Kudo, Y., Tada, R., Minami, I., Finkel, R. C., and Matsuzaki, H. 2007 Japan Sea oxygen isotope stratigraphy and global sea-level changes for the last 50,000 years recorded in sediment cores from the Oki Ridge. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology* 247 pp.5-17.
Yoshida, A., Kudo, Y., Shimada, K., Hashizume, J., and Ono, A. 2015 Impact on landscape changes on obsidian exploitation since the Paleolithic in the Central highland of Japan. *Vagetation History and Archaeobotany* Doi: 10.1007/s00334-015-0534-y

研究紀要　第30号
—設立35周年記念—
2016
平成28年3月14日　印刷
平成28年3月18日　発行

発　行　公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－0108　熊谷市船木台4丁目4番地1
http://www.saimaibun.or.jp
電　話　0493－39－3955
印　刷　朝日印刷工業株式会社